

平成 20 年度グループ・プロジェクト研究計画書

(フリガナ) 代表者氏名	(ヤマザキ リュウジ) 山崎 竜二	研究科 センター等	知識科学研究科
		研究室名	藤波研究室 (スキルサイエンス ラボラトリ)
研究課題	世代間コミュニケーション・プロジェクト - 高齢者の知識資源を次世代に活かす社会システムの構築 -		
研究目的	<p>目的：認知症ケアのコミュニティ創造 高齢者施設と地域、高齢者と他世代の隔離状況を解消し、認知症の人が受け入れられる地域社会を創り、そのためのコンセンサスを育むことを目的とする。</p> <p>1) 高齢者の認知・情動・意欲など精神機能に訴え、秘めた力を引き出す。 2) 高齢者の知識資源を有効活用し、子どもの教育と相乗効果をもたらす。 3) 子ども・保護者との接点から、認知症を抱える人の身近な理解を促す。 認知症の人と関わることが人々に喜びをもたらす社会の仕組みを築く</p>		
研究方法	<p>宮竹小学校区（モデル地区）をフィールドに、子どもの創作劇をアプローチとする。校区の一般高齢者が参画し、児童が高齢者との協働で体験談を作品化する取組みを進める。協働の支援者として保護者やアーティストの参画を促す仕組みを築く。児童が認知症高齢者と交流する場を最初に設けて実践モデルを改良し、創作劇をコミュニケーション媒体としたコミュニティ創造の仕組みを確立する。</p>		
研究の特色・意義	<p>本研究では、子どもを巻き込んでコミュニティを創る点に特色がある。また、その実践モデルは子どもと高齢者の協働によって思い出の作品化を進める創造モデルである点にも特色がある。仮説としては創作の過程と作品の演出が人々の関心を引き込む魅力として作用し、アートの力が引き寄せなければ会えない認知症の人との交流へと誘われる。プロジェクト遂行上、コミュニティを創る要となる子どもが認知症の人にどのような視線を向けるかは本質的な点であり、臨床哲学の取組みとして論点深化を図る。</p>		
期待される成果	<p>子どもを中心に保護者や学校教諭、地域住民の高齢者やアーティストなど普段は認知症の人と関わることのない人々が積極的に支援に携わる関係構築を期待できる。老人会など自治組織の活用や子どもを含むボランティア活動の促進により地域貢献として具体的な活動成果を上げる。プロジェクト遂行による介護福祉の方法論構築と実践理念・本質追究の成果については学会や研究会で報告を行う。一連の実践を通じて、従来の成長偏重の社会追求に潜在する問題、衰えゆく人間のあり方を受容可能な成熟社会のモデルを探る。</p>		
備考			